

J **apanese text**

2019年 春/夏号 日本語編

インタビュー

アーティスト・インタビュー

千住 博

——次々と新作を生み出すパワー

写真=角田 進、村上義親 (制作風景)

文=小松庸子

p.066

今世界で最も有名な日本画家の一人、千住博さん。そんな千住さんが約3年の月日をかけて制作した《断崖図》(下)と《瀧図》(右)。2020年、真言密教の聖地、和歌山県・高野山金剛峯寺に奉納される作品だ。半永久的に残る大作ゆえの苦労や、その後の最新作についてお話を伺った。

「この制作にあたり、何がいちばん大変でしたか?」の問いに、「何から何までです。真言密教の開祖である空海が存在が大きすぎて、簡単には描かせてもらえなかったんです。世界遺産でもある高野山で永久展示になる作品という畏怖もある。何をやってもうまくいかず、本当に苦しみました。これ以上は描けない!というところまで自分を追い込んで、ようやく生み出した作品です」と千住さん。

立場の重さや知名度に応じて、制作のハードルは毎回高くなるから、最新作が最も苦しいと語る。しかし驚くべきことに、壮絶な制作期間を経て2018年の春先に金剛峯寺の襖絵を仕上げた後から4~5か月後には、悠然と猛然と次なる新作に取り組んでいる姿があった。描いていたのは2019年2月に日本橋三越本店で開催された個展に向けた作品。画業40年にして、初めて取り組んだ水墨画だ。

「常に水墨画をやってみてみたい気持ちはもっていましたが、今回初めて理由もなく、自然に手が伸びたのです。なぜ今だったのか。60歳を迎え、ようやく僕の中のリズムが整ったのかもしれないですね」

今回の題材は雲。墨を紙に垂らしたとき、そこには雲としかいえないような形が浮かび上がってきたのだという。「楽

しくてたくさん描きました」と目を輝かせる千住さんの絵に向かう心は、今も画学生のまま。常に全力で「今を生きる」千住さんの最新作、これからも目が離せない。

千住 博(せんじゅ・ひろし)

1958年東京都に生まれる。東京藝術大学大学院修了。京都造形芸術大学大学院教授。ニューヨークを拠点に精力的に活動。代表作の《ウォーターフォール》でベネチアビエンナーレ名誉賞を受賞したほか、国内外で数々の賞を受賞。昨年は、長年の功績により日米特別功労賞を受賞。

www.hiroshisenju.com

高野山金剛峯寺 襖絵完成記念 千住博展

3月2日~4月14日

そごう美術館(横浜)

4月23日~6月16日

北九州市立美術館 分館

9月14日~11月4日(予定)

神戸ファッション美術館 / 神戸ゆかりの美術館

11月16日~2020年1月19日(予定)

愛媛県立美術館

(写真)

左:《断崖図》。和紙を揉んでできた「しわ」の上から絵の具を流し、断崖の表情を作り出す。

上:《瀧図》。滝を写し描いたものではなく、絵の具を上から下に流して表出させた「滝そのもの」。「技法と内容が完全に一致して」でき上がる。

上: 金剛峯寺襖絵を制作中のワンシーン。ニューヨークのアトリエにて。

目[mé]

——不可解な世界の隙間を開く「実感」のアート

撮影=西山 航

文=住吉智恵

p.068

全国の芸術祭や国際美術展でいま引っ張りだこの現代芸術活動チーム、目[mé]は異色のアーティストコレクティブだ。中心メンバーはアーティストの荒神明香、ディレクターの南川憲二、制作統括の増井宏文の3名。もともと単独で作品

を発表していた荒神の、その深遠な洞察力と無限大のスケールをもつ発想に圧倒的に魅せられた南川と増井が、彼女のアイデアを作品として実現するために最強チームを結成したのだ。

近作では、雑木林の奥に湖が忽然と現れたインスタレーション《Elemental Detection》(さいたまトリエンナーレ 2016) が話題を呼んだ。空き地に鏡を敷きつめた湖は空を映しこみ、足を踏み出すまで半信半疑なほど、真に迫るリアリティと詩的なファンタジーを同時に実現した。「現実のどこにもない究極の風景をつくらうというアイデアを作品化しました。水面のように反射して景色を映すことができる素材を、時間をかけて開発したんです」(南川)。ある現象の“不思議”さを、不思議なまますくいと、そのエッセンスをもとに、日常の地続きの風景のなかに「異空間」を構築する。作品に出合った瞬間、観る者は五感の隙間をねらい撃ちされ、ある強烈な「実感」を体験する。万物宇宙に存在する「果てしなく不確かな現実世界が、実感に引き寄せられる」(目 Facebook ページより) 体験を作品化してきた。

森美術館の企画展「六本木クロッシング 2019」では、大海原の沖合で高波にまさにのまれようとする瞬間をフリーズした新作を発表する。「自然の風景を遠くから見ているイメージと、実際にその圧力や量感に近づいて触れることとは全く別ものです。私たちは海や山を記憶で理解していますが、海の水や樹々の葉の一つ一つの粒子に至る、次元や単位を超えた現実を肌感覚で把握してはいないんじゃないかと」(荒神)。彼らと話しながら、その発想の源泉に意識を遠く飛ばそうとすると、子どもの頃に寝室の天井を眺めながら、宇宙や深海の神秘に思いをめぐらせては恐怖で気が遠くなったことを思い出す。「世界の隙間にひそむ“扉”を開いたり閉じたりすることがアートかもしれない、と思うんです。その不思議な事象を確かめようとするだけで確かであり、その“確かさの深まり”のなかにアートがあるのではないかと」(荒神)。物心ついたときから「アートの実感」に気づき、追求し続けてきた荒神と、それを概念化・物質化するために彼女を支える南川と増井。現実の不確実性が極まりゆくいま、

既成概念や定説を疑い、不可解な世界を解きほぐそうとする試みを諦めない彼らのアートは、いつか新しい哲学を生むきっかけにもなるかもしれない。

目 [mé]

荒神明香、南川憲二、増井宏文を中心とする現代芸術活動チーム。主な活動に『たよりない現実この世界の在りか』資生堂ギャラリー、『repetition window, 2017』Reborn-Art Festival 2017、『TOKYO MOMENT』東京都現代美術館など。東京藝術大学非常勤講師。
www.facebook.com/mouthplustwo/

六本木クロッシング 2019 展：つないでみる

～5月26日
森美術館
www.mori.art.museum/en

VOCA 展 2019

3月14～30日
上野の森美術館
www.ueno-mori.org/exhibitions/main/voca/2019/

個展「非常にはっきりとわからない」

11月2日～12月28日(予定)
千葉市美術館
www.ccma-net.jp

(p.068)
埼玉県北本市にある目 [mé] のアトリエ懇所にて。

(p.069)
《Elemental Detection》2016
旧民族文化センターにて制作
さいたまトリエンナーレ 2016 参加作品
写真=衣笠名津美

《おじさんの顔が空に浮かぶ日》2013-2014
栃木県宇都宮市街地にて制作
主催：宇都宮美術館 館外プロジェクト